

(参考2) アセスメントツール

従来のリスク・アセスメント表は、子どもの安全を保証するために、家族の欠陥の精査をすることに重点が置かれており、リスクだけで家族を評価していくことが家族との対立関係を助長して、虐待対応の目的である「子どもにとって安全な養育」を達成することが難しくなるという問題がありました。

家族と対立するのではなく、家族と協働して、子どもの危険と安全について話し合い、アセスメントとプランニングのプロセスに、子ども、親、家族をしっかりと巻き込むときに、子どもの安全が長期にわたって強化されます。

ここでは、このような目的で開発されたアセスメントツールとして、「安全パートナーリング (Partnering For Safety, PFS) のアセスメントとプランニングの枠組みシート」と「三つの家」の二つのツールを紹介します。

1 安全パートナーリング (Partnering For Safety, PFS) のアセスメントとプランニングの枠組みシート

(※このツールの利用にあたっては、ソニア・パーカー (Sonja Parker) 著 「安全パートナーリングのアセスメントとプランニングの枠組み：家族と共働して包括的な児童保護リスクアセスメントとプランニングをするために、安全パートナーリングをどう使うか」 (“Partnering for Safety” Assessment and Planning Framework: A detailed exploration of how to use the PFS framework to undertake comprehensive child protection risk assessment and planning in collaboration with families, 2012, SP Consultancy, 井上直美・井上薫訳 安全パートナーリング研究会) を参照してください。冊子の入手先は、英語版 www.spconsultancy.com.au 日本語版 pfsdeouen@gmail.com です。以下の記述は、著者、訳者からの許可を得て、この冊子から一部改変して引用、要約しています。

また、「子ども・家族・援助者のパートナーシップ研究会」(代表：井上直美) では、このツールについての実践者向けの研修会を開催していますので、それに参加するなどして理解を深めることができます。)

安全パートナーリング (Partnering For Safety, 以下 PFS と略す) は、オーストラリアの児童保護のコンサルタント ソニア・パーカーとアメリカのソーシャルワーカー、家族療法家 フリップ・デクターによって開発されたツールです。

このツールは、子ども、家族、家族のネットワークと協働して行う包括的なアセスメントとプランニングの枠組みを中心に組み立てられており、通告ケースを次の4つの鍵となる問いかけで整理することから始めます。

(1) 4つの鍵となる問いかけ

1. 私たちが心配になるようなどんなことが家族に起きたのか／起きているのか？ (こ

れまでの危害、難しくしている要因)

2. 家族の中でうまくいっていることは何か? (保護的な行動、強み)
3. 安全の判断: (安全のものさし【0-10 のものさし】で、この時点で、家族のもとでは子どもはどれくらい安全か?)
4. 何が起きる必要があるか? (今後の危険、安全ゴール、次のステップの特定)

この4つの問いかけは、P F Sの神髄であるリスクアセスメントとプランニングのプロセスの土台になります。4つの問いかけすべてに答えることで、心配なこと(リスク)とうまくいっていること(強み)の両方に焦点を当てたバランスの取れたアセスメントになり、アセスメントとプランニングのプロセスの一部として安全の判断が明らかになり、アセスメントから子どもの今後の安全づくりに向かうことに集中して取り組めます。

(2) P F Sの枠組みシートの使い方

P F Sの枠組みシートは、通告されたケースの初期情報をバランスよくアセスメントして、何が分かっているか何が分かっていないかや、安全の判断を明確にして、子どもの今後の安全づくりにつながる次のステップを導き出すのに有用です。

また、枠組みシートは、緊急受理会議や個別ケース検討会議でホワイトボードに情報をカテゴリーごとに書き出してマッピングしながら、話し合いを行うこともできます。

枠組みシートは、子ども、家族、家族のネットワークと協働してアセスメントとプランニングが行えるようにデザインされています。枠組みを家族に使うのは、継続的でダイナミックなプロセスであり、実践の場では、次のように使っていきます。

① 通告されたケースの初期情報に基づいて(新規ケース)、あるいはケースファイルに入っている情報に基づいて(継続ケース)、家族に起きていることに関する児童相談機関の初期評価をマッピングします。

② 子どもの安全と健康に関わることで、家族にこれまで何が起きて、今何が起きつつあるのかについて、子どもの生活に関わる重要な人々全員から新しい情報を集めます。

③ 誰(家族と専門職)にでも見せることができるように、その情報をP F Sの枠組みに随時更新しながら入れていきます。

④ 子どもに起きた危害、今後の危険を理解したうえで、子どもは今後安全だと誰もが安心できるために親は今後子どもの養育においてどんなことをしている必要があるか(安全ゴール)を、関わる人全員に聞きます。この安全ゴールが、家族と一緒に作る包括的で緻密な安全計画づくりに、焦点と方向性を与えることになります。

【P F S の枠組みシート】

安全パートナーリングPARTNERING FOR SAFETYのアセスメントとプランニングの枠組み	
子ども、親、専門職、家族、ほかの重要人物を含む、子どもに身近な人々全員の見方を引き出して文書化する共働的なアセスメントとプランニングの枠組みです。この枠組みを個別または合同で使って人々の見方を引き出してから、一つに合体させてください。	
誰の見方が記録されるか	日付
マッピングの目的:	
心配していること WHAT ARE WE WORRIED ABOUT?	うまくいっていること WHAT'S WORKING WELL?
これまでの危害 Past Harm これまでに子どもがこの親の養育で傷や害を受けたときのこと	保護的な行動 Acts of Protection これまでに親が子どもを守れたときや、危害が起きるのを止めるために何かしたときのこと
難しくしている要因 Complicating Factors 家族が子どもを守るのをより難しくしている要因や児童相談機関と家族が協力するのをより難しくしている要因	強み Strengths 家族の生活にあることで、今後家族が子どもを守るのに役に立つようなこと
安全のものさし SafetyScale : 0-10のものさしで、10は児童相談機関が事例を終結できるほどの安全がある、0は子どもが家庭で暮らせるほどの安全が今はないとします。今の状況をどこにつけますか? (それぞれの人の点を下のものさしに付けてください)	
0	10
起きる必要があること: 今後の安全のための計画作り WHAT NEEDS TO HAPPEN?: PLANNING FOR FUTURE SAFETY	
今後の危険 Future Danger 今後子どもが危害を受け得ることで、親が子どもの養育でするかもしれない(しないかもしれない)と心配していることは何ですか?	安全ゴール Safety Goals 子どもをこの危険から守るために、今後の養育で親はどんなことをしますか? 児童相談機関は親にどんなことをしてもらいたいのですか? 児童相談機関は事例を終結する気になるまで、どれぐらいの間、親がこれをしているのを確認する必要がありますか?
今後の安全に向けての次のステップ Next Steps toward Future Safety この安全ゴールの達成に向けて、それぞれが取る必要がある次のステップについて、それぞれはどう考えますか?	
©2012SonjaParkerandPhilDector 日本語訳 井上直美 「SignsofSafety」(Turnell&Edwards,1999&Turnell&Parker2009)、 「MassachusettsSafetyMappingFramework」(Chin,Dector,MadsenandVogel,2010) より改変 Copyright2011SPConsultancy. 連絡先sonjapa@inet.net.au ブックレットの入手先: 英語版www.spconsultancy.com.au 日本語版pfsdeouen@gmail.com	

ここでは、初期情報の整理と評価のために、例えば、次のような通告事例について、この PFS のアセスメントとプランニングの枠組みシートでマッピングしてみます。

〔通告事例〕		虐待相談・通告受付票		様式 1
受理年月日		平成 ××年 5月 22日 (金) 午前 (午後) 16時00分		
子ども	フリガナ氏名	愛媛 一郎 (男・女 所屬 (城山小4年) 続柄 ())		
	氏名	愛媛 花子 (えひめ はなこ) 続柄 (実母)		
保護者等	氏名	愛媛 太郎 (えひめ たろう) 続柄 (養父)		愛媛 花子 (えひめ はなこ) 続柄 (実母)
	職業	会社員		パート
	年齢	昭和××年○月○日生 (37歳)		昭和××年△月△日生 (28歳)
	住所	M市 R町 3-2-11 ○○アパート 2F 201号 (電話 08×-123-123×)		08×-123-123×
携帯電話		090-123412××		090-987698××
虐待内容		誰から 養父から。実母の話では、養父は怒りやすく、しつこく厳しい人との話がある。 いつから 5月7日に、左太ももにあざ。5月20日には、両頬にあざ。 頻度は 本児は、これまでも、よく養父に叩かれたことがあると言うが、学校では傷は確認していない。 どんなふうに ・5月7日に体育の着替え中に、本児の左太ももにあざがあるのを学担が見つけた。本児は「昨晚、養父から、ゲームばかりするなと言われ、蹴られてきた。これまでもよく叩かれたり蹴られたりしたことがある」と言った。母親を呼んで事情を聞いたところ、「本児がいつまでもゲームをして宿題をしようとしないので、養父が怒って本児を蹴った」と。あざができるような暴力は虐待にあたるので養父を止めさせるように母に言ったが、母によれば、「養父は怒りやすく、しつこく厳しい。気に入らないことを言えば、すぐに怒りだすので怖い」との話。 ・その後注意して見ていたが、5月20日に、両頬にあざを作って登校してきた。本児は「養父に叩かれた。理由は分からない」と言う。その日の夜7時ごろに学担と教頭が家庭訪問し、在室していた養父と話した。養父は「本児が食事中に肘をついていたので注意した。素直でない手で顔を叩いた。しつけようと思ってやっている。学校が子どものしつけをしてくれるのか?」と言う。 ・本児の顔のあざは、今日はまだ青あざになって残っている。		
虐待の種類		(主◎ 従○ : ◎身体的 / 性的 / ネグレクト / 心理的)		
子どもの状況		・現在の居場所: 自宅 ・保育所等通園の状況: 毎日学校には登校している。遅刻、欠席もない。		
家庭の状況		・家庭内の協力者 無・有 () ・家族以外の協力者 無・有 () ・きょうだいの有無 無・有 () (異兄妹がいる。愛媛丸子 3歳 城山保育園) ・DV被害等 無・有 ()		
情報源と保護者の了解		・通告者は (実際に目撃している) 悲鳴や音等を聞いて推測した ・通告者は 関係者 () から聞いた ・保護者は この通告を (承知・拒否・知らせていない)		
通告者	氏名	城山小学校 教頭 ○○		
	住所	電話		
	関係	家族・近隣知人・市福祉事務所・医療機関・警察・学校・ ()		
	通告意図	子どもの保護 ・ 調査 ・ (相談)		
調査協力		調査協力 ((諾) 否) 当所からの連絡 (諾) ・ 否)		

通告の初期情報を PFS の枠組みシートの各領域に分類してマッピングしていきます。

1 心配していることー私たちが心配させるようなどんなことが家族に起きたのか／起きているのか？

これまでの危害

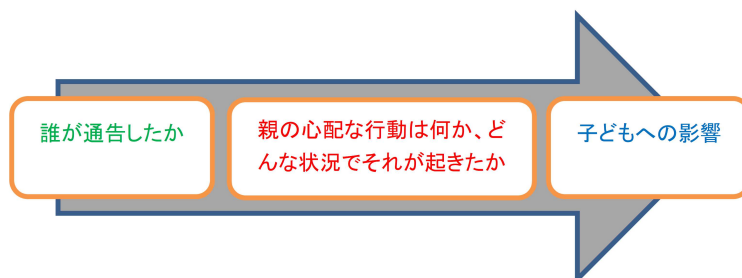
心配していること WHAT ARE WE WORRIED ABOUT?
これまでの危害 Past Harm これまでに子どもがこの親の養育で傷や害を受けたときのこと

【ポイント】

- ・子どもたちが危害を受けた時のことを記述する。
- ・「誰が連絡してきたのか」、「親のどんな行動が危害をもたらしたのか」、「親がどんな行動をしなかったことが危害につながったのか」、「どんな状況でその行動が出てきたのか」、「その行動が子どもにど

んな影響を与えたのか」を記述する。

- ・できるだけ具体的に書く（子どもを殴る、子どものいるところで親が片方の親を殴ったり怒鳴る、子どもは顔が腫れあがる怪我をした、子どもの体重増加がみられない等）



難しくしている要因

難しくしている要因 Complicating Factors
家族が子どもを守るのをより難しくしている要因や児童相談機関と家族が協力するのをより難しくしている要因

【ポイント】

- ・親が子どもを安全にするのを難しくさせている要因、あるいは今後の安全を達成するのをより難しくさせる問題を記述する。（薬物依存、精神疾患、貧困、孤立等）
- ・子どもへの危害を直接引き起こして

ないことを挙げる。家族と援助者との対立など両者の協力を難しくさせる要因も入る。

- ・これまでに起きた危害と、状況をより難しくしている要因を区別して捉えることが重要。

2 うまくいっていることは何か？

「うまくいっていること」の情報から、今後の安全に関するアイデアが湧いてきます。また、資源（リソース）や力量（キャパシティ）というような、今後の安全を作るために家族が頼ることができる強みも教えてくれるので、この部分はとても重要です。

保護的な行動

保護的な行動 Acts of Protection これまでに親が子どもを守れたときや、危害が起きるのを止めるために何かしたときのこと
--

【ポイント】

- ・親が、何かした／何か決めた結果、起きるかもしれない危険に対して子どもが安全であった時のことを記述する。
- ・保護的な行動は、問題に対する「例外」であり、持続的な安全を作る材料になる。

・保護的な行動の記述は具体的である必要がある。親の行動や子どもへの影響を、「何が、どこで、いつ、どれくらいの頻度で、それが起きたか」など、細かいことが具体的に書かれることが重要。

強みの記述

強み Strengths 家族の生活にあることで、今後家族が子どもを守るのに役に立つようなこと
--

【ポイント】

- ・子どもの状況を良くしたり、家族が子どもを守るのに役立つようなことで、家族の中に起きていることや親の資源や力を、「心配していること」に関連付けて記述する。
- ・これまでに子どもの安全と健康につ

ながった、そしてこれからの子どもの安全と健康に役に立つかもしれない家族の属性、資源、能力を具体的に記述する。

3 安全のものさし

[illegible]

【ポイント】

- ・「子どもはどのくらい安全なのか？」という最も決定的な判断のスケール。
- ・家族に何も変化がなかったら、今の状況で子どものための安全はどれくらいあるのかという個人の判断を、0～10の数字を使って表す。
- ・ものさしのどこに数字がついたとしても、まったくかまわない。その人にその数字につけさせた、「うまくいっていること（強み、保護的な行動）」は何か？ 「心配なこと（危害、難しくしている要因）」は何か？ ものさしの上で1高くなるには、家族に何が起きることが必要か？ などと質問して、人々の見方をさらに話し合うことができる。

4 起きる必要があること：今後の安全のための計画作り

今後の危険の記述

今後の危険 Future Danger

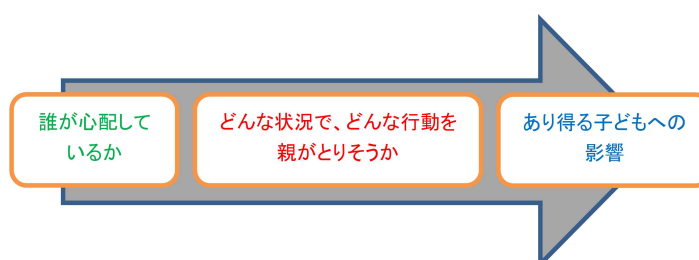
今後子どもが危害を受け得ることで、親が子どもの養育でするかもしれない(しないかもしれない)と心配していることは何ですか？

【ポイント】

- ・親が今後どんなことをして、あるいはどんなことをしないことが子どもへの危害につながるかもしれないと、私たちが心配していることを記述する。
- ・「これまでの危害」と「難しくして

いる要因」をよく検討することで、「今後の危険」が特定される。

- ・今後起きるかもしれないと心配している親の行動、つまり私たちが親に変えてと言っていくことになる行動を、はっきり書くことが重要。また、そういう行動が起きやすい状況について、及び子どもに与える心配な影響についてはっきり書くことも重要。



・危険の記述を書くときは、ワーカーが自分たちの見方を特定する危険の記述をまず書いて、それから家族やほかの重要な人々に質問して、その人たちの見方を引き出すやり方が役に立つ。

・家族、専門職の全員がすべての記述文に賛成しなければならないということではない。重要なのは、誰もが他の人の心配を理解し、その心配に対応することが児童保護の介入の目的であることを認識すること。

安全ゴール

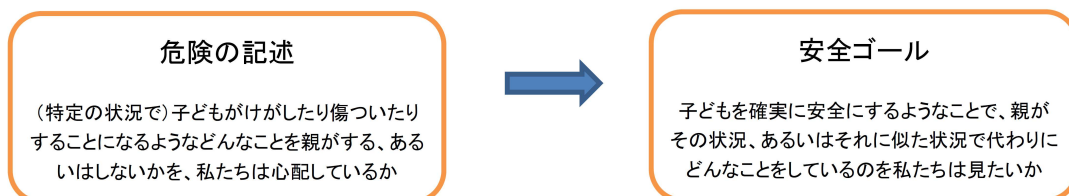
安全ゴール Safety Goals

子どもをこの危険から守るために、今後の養育で親はどんなことをしますか？ 児童相談機関は親にどんなことをしてもらいたいのですか？ 児童相談機関は事例を終結する気になるまで、どれぐらいの間親がこれをしているのを確認する必要がありますか？

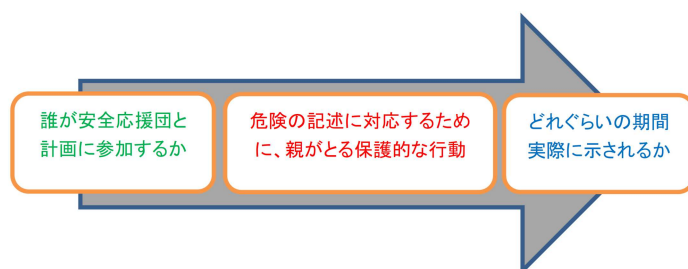
【ポイント】

・特定された「今後の危険」から子どもを守るために、親は子どもの養育に関して以前と違って何をしているのか、これを行動の形で（～していない、ではなく、～している）明確に記述する。

・「安全ゴール」は、「(今後の) 危険の記述」に直接対応するようにつくる。「危険の記述」では、子どもに危害をもたらし得る潜在的に危険な状況や親の行動・行為を特定し、「安全ゴール」では、今後その状況で起きるのを見たい、子どもの安全を確実にする親の保護的な行動を明らかにする。



・安全ゴールでは、今後の保護的な行動を特定すると同時に、「誰が安全応援団（支援者のグループ）と計画に参加するか」、誰もが安全を確信できるためには「どれぐらいの期間安全ゴールの達成が示される必要があるか」の二つの要素を入れる。



今後の安全に向けての次のステップ

今後の安全に向けての次のステップ Next Steps toward Future Safety

この安全ゴールの達成に向けて、それぞれが取る必要がある次のステップについて、それぞれはどう考えますか？

【ポイント】

- ・「次のステップ」は、安全ゴールの達成に向けて、そしてケースを終結できるほど十分な安全作りに向けて、家族と児童相談機関は次にどんなことをする必要があるかを表す。
- ・安全ゴールの達成が実際に示されるように取り組むステップを家族とその応援団によく考えてもらうため、共働的に特定する。
- ・「次のステップ」は、ケースのアセスメントとプランニングを進めるためのステップ。ケースが前進し、次のステップが達成され、新しい次のステップが特定されるにつれ、常に更新され続ける。

事例のケースについて、通告の初期情報をP F Sの枠組みでマッピングすると、例えば次のようになるでしょう。

安全パートナーリングPARTNERING FOR SAFETYのアセスメントとプランニングの枠組み	
子ども、親、専門職、家族、ほかの重要人物を含む、子どもに身近な人々全員の見方を引き出して文書化する共働的なアセスメントとプランニングの枠組みです。この枠組みを個別または合同で使って人々の見方を引き出してから、一つに合体させてください。	
誰の見方が記録されるか : M市の子育て支援課相談員の見方	
日付 : H××. 5. 21	
マッピングの目的: 通告情報に基づく初期アセスメント	
心配していること WHAT ARE WE WORRIED ABOUT?	うまくいっていること WHAT'S WORKING WELL?
これまでの危害 Past Harm これまでに子どもがこの親の養育で傷や害を受けたときのこと ・《城山小からの情報》H××.5.7 体育の着替え中に本児の左太ももにあざがあるのを学担が見つけた。本児は、「昨晚、養父からゲームばかりするなど叱られ、蹴られた。これまでもよく叩かれたり蹴られたりしたことがある」と言った。 ・《城山小から》H××.5.20 左頬にあざ(紫色で大人の手の跡)を作って登校。本児は「養父に叩かれた。理由は分からない」と言った。学担と教頭が家庭訪問して養父に聞いたところ、「本児が食事中に肘をついていたので注意した。素直でないので手で顔を叩いた。しつけようと思ってやっている」と言った。母親は黙っていた。	保護的な行動 Acts of Protection これまでに親が子どもを守れたときや、危害が起きるのを止めるために何かしたときのこと ・母は、学校行事等への協力はよくしてくれている。学担との関係は良い。 ・母は、養父の本児への体罰は行き過ぎだと思っており、養父を止めたいと思っているが、怖くて注意できないと言う。 ・本児は、毎日学校には登校しており、遅刻や欠席もない。
難しくしている要因 Complicating Factors 家族が子どもを守るのをより難しくしている要因や児童相談機関と家族が協力するのをより難しくしている要因 ・養父は、本児への体罰を「しつけ」だと主張しており、虐待の認識がない。 ・養父は、学校の訪問に拒否的。 ・母の考えはよく分からない。 ・母によれば、養父は怒りやすく、しつけに厳しい。気に入らないことを言えばすぐに怒り出すので怖い。DVがあるかどうかは不明。	強み Strengths 家族の生活にあることで、今後家族が子どもを守るのに役に立つようなこと ・母は、学校行事等への協力はよくしてくれている。学担との関係は良い。 ・母は、養父の本児への体罰は行き過ぎだと思っており、養父を止めたいと思っているが、怖くて注意できないと言う。 ・本児は、毎日学校には登校しており、遅刻や欠席もない。
安全のもののさし SafetyScale : 0-10のもののさしで、10は児童相談機関が事例を終結できるほどの安全がある、0は子どもが家庭で暮らせるほどの安全が今はないとします。今の状況をどこにつけますか?(それぞれの人の点を下のもののさしに付けてください)	
0	10
2-3 (市の相談員)	
起きる必要があること: 今後の安全のための計画作り WHAT NEEDS TO HAPPEN?: PLANNING FOR FUTURE SAFETY	
今後の危険 Future Danger 今後子どもが危害を受け得ることで、親が子どもの養育でするかもしれない(しないかもしれない)と心配していることは何ですか? ・《市の心配》養父からの体罰によるしつけがエスカレートして、本児が怪我をすることが多くなったり、大けがを負う心配がある。 ・《学校、市の心配》本児が家庭で体罰を受けることが当たり前になると、情緒不安定になり、学校で友達に乱暴なふるまいをすることにならないかと心配。	安全ゴール Safety Goals 子どもをこの危険から守るために、今後の養育で親はどんなことをしますか? 児童相談機関は親にどんなことをしてもらいたいですか? 児童相談機関は事例を終結する気になるまで、どれぐらいの間、親がこれをしているのを確認する必要がありますか? ・養父が体罰によるしつけは虐待にあたるうえに、本児に与える悪い影響が大きいことに気づき、体罰を用いないしつけをするようになる。 ・母が養父の体罰を止めることができるようになる。その方法について、母と養父が率直に話し合うことができる。 ・養父と母は、体罰を用いない子育てについて、市や主任児童委員やその他の援助職と一緒に取り組むようになる。 ・本児が安全で尊重されるやり方でしつけられることが今後も持続すると、市や主任児童委員やその他の援助職の全員が確信できるように、少なくとも6ヶ月間はこの取り組みの実行を確認する必要がある。
今後の安全に向けての次のステップ Next Steps toward Future Safety この安全ゴールの達成に向けて、それぞれが取る必要がある次のステップについて、それぞれはどう考えますか? ・本児に会って、安全確認し、怪我した理由や家庭でのことを聞いてみる。 ・異兄妹の状況、養父や母の関わりについて、城山保育園に照会し情報収集する。 ・家庭訪問して、本児の安全と養育について、養父と母の見方を聞き、市の初期の見解を伝える。市の安全ゴールについて説明し、親と共同して取り組むことを説明する。	

©2012SonjaParkerandPhilDector日本語訳 井上直美「SignsofSafety」(Turnell&Edwards,1999&Turnell&Parker2009)、

「MassachusettsSafetyMappingFramework」(Chin,Dector,MadsenandVogel,2010)より改変

Copyright2011SPConsultancy.連絡先sonjapa@inet.net.au

ブックレットの入手先:英語版www.spconsultancy.com.au 日本語版psdeouen@gmail.com

2 「三つの家」によるアセスメントとプランニング

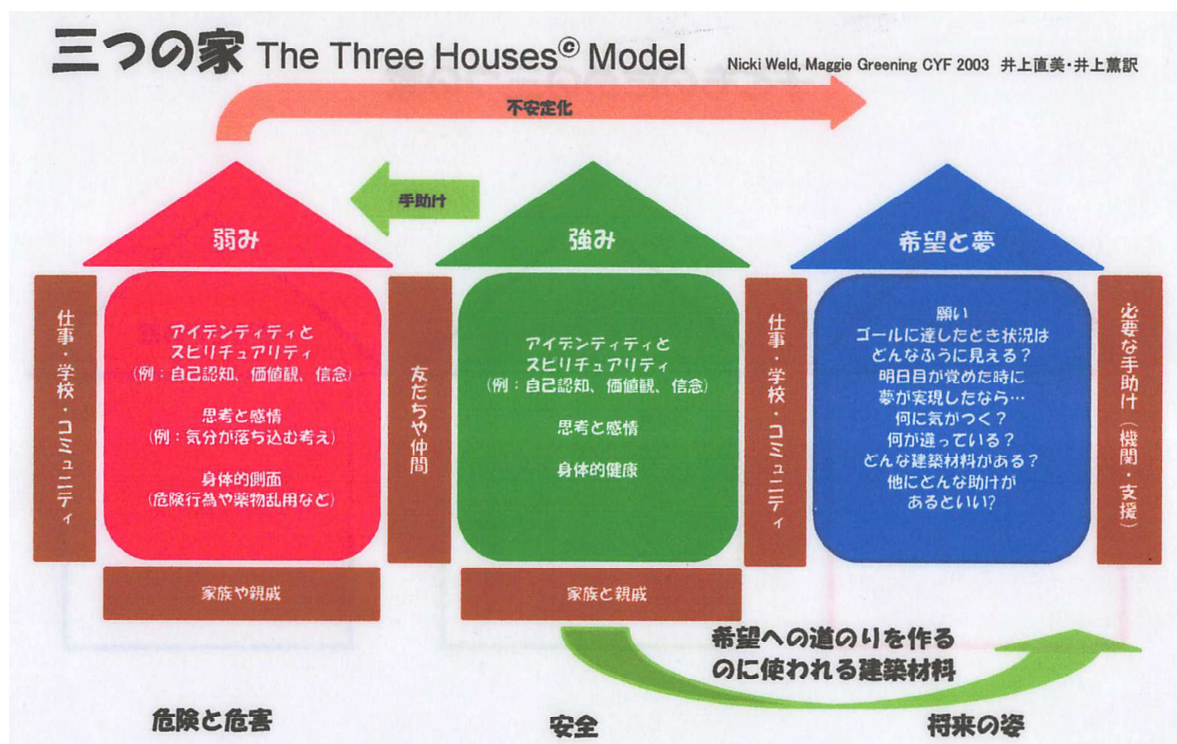
(※「三つの家」についての詳細は、ニキ・ウェルド (Nicki Weld) , ソニア・パーカー (Sonja Parker), 井上直美, 2015. “「三つの家」を活用した子ども虐待のアセスメントとプランニング ―The Three Houses Tool A Handbook for Application―”, 明石書店, を参照してください。以下の記述は、編著者からの許可を得て、この書籍から一部改変して引用、要約しています。

また、「子ども・家族・援助者のパートナーシップ研究会」(代表：井上直美) では、このツールについての実践者向けの研修会を開催していますので、それに参加するなどして理解を深めることができます。)

「三つの家」(The Three Houses Tool) は、ニュージーランドのソーシャルワーカーのニキ・ウェルド (Nicki Weld) とマギー・グリーニング (Maggie Greening) が、マオリ族の健康モデル、ナラティブ理論、強みに基づくアプローチ、解決志向アプローチ、サインズ・オブ・セイフティアプローチなどに影響を受けて、2003 年に開発したアプローチです。

ウェルドは、このツールを「子ども、少年少女、大人の声が聞き取られ、その情報がアセスメントとプランニングに取り入れられるのを手伝うツール」と表現しています。

「三つの家」は、次のような概念図となっています。



(1) 三つの家の使い方

「三つの家」では、個人や家族を「弱みの家」、「強みの家」、「希望と夢の家」の三つの領域に分けて、問題（心配なこと）、解決するための資源（リソース）、将来の解決像（安全ゴール）、「希望と夢の家」への道のり（今いるところ、到達の方法）を聞いていきます。

このツールを親や家族と使うことで、家族が自分の家庭で何がうまくいっているか、何が心配か、家族の希望と夢は何かを考えるのを手伝うことができます。また、ペアレンティングの役割を担う個人に明確に焦点を当てて、自分たちのペアレンティングに関するいいこと、ペアレンティングに関する心配なこと、子どもの親であることの希望と夢は何かを考えるのを手伝うこともできます。

(2) 「三つの家」を使う手順

①まず、三つの家を親と使う前に、初期情報をよく考えて、児童相談機関（市町）の相談員としての見方を「三つの家」または「PFSの枠組みシート」で整理しておきます。

親との面接用に、三つの家をつくるための適当な大きさの白紙を数枚とカラーペンやフェルトペン数本を持っていけます。

②インテークケースまたは新規の通告ケースの場合には、例えば、親に次のように言って始めます。

「私は、〇〇市の子育て支援課の相談員で△△といいます。電話でお話ししたように、お子さんの体に何度か傷があって、お子さんのことが地域で心配に上がったという連絡を受けました。今は私はこの連絡が正しいのかどうかは分かりませんが、この連絡は重大なこととして扱う必要があります。ご家族であるあなたやお子さんに何が起きているのかが分かるといいので、あなたやお子さんにとって身近な方たちとお話しさせていただきたいです。もし何か困っていることがあるなら、あなたがそれを解決してお子さんを安全に世話していかれるのをどうお手伝いできるか、いろいろ話し合わせてもらいたいです。私は、三つの家と呼ばれているやり方でお話を聞くのが好きです。これは、私がお家族の見方を聞いて理解するのを手伝ってくれます。ですから、まず三つの家について説明し、その後で、どんな様子なのか、ご家族に何が起きているのか、あなたの話を聞かせてもらえますか？それでよろしいですか？」

また、介入が長期になっている場合には、例えば次のように言って始めることができます。

「私は、〇〇市の子育て支援課の相談員で△△といいます。電話でお話ししたように、新しい担当者です。また違う相手と話していかなければならないわけで、やりにくく感じてもらえるのではないかと思います。でも、これは新しいスタートになって、新鮮な目で状況を見ていく機会になるかもしれません。ですから、あなたがよければ、これまでどうなっていて、ご家族のあなたやお子さんにとって何が起きているということなのか、お話

を聞くことから始めさせてもらいたいです。私は、三つの家と呼ばれているやり方でお話を聞くのが好きです。これは、私がお家族の見方を聞いて理解するのを手伝ってくれます。ですから、まず三つの家について説明し、その後で、どんな様子なのか、ご家族に何が起きているのか、あなたの話を聞かせてもらえますか？それでよろしいですか？」

③聞き方のプロセス

三つの家を次のようなプロセスで聞きます。

- 1 番目、親の見方を聞く。
- 2 番目、児童相談機関（市町）がどう見ていると思うかを、親に聞く。
- 3 番目、児童相談機関（市町）の見方を話す。

（3）三つの家をつくる

①どの家から始めるかを親に選んでもらう。

やりたい家から始めていいことと、それぞれの家に入れたいことを全部入れ終わるまで家から家を行ったり来たりしていいことを説明します。

②絵を描くかどうか、字を書くかどうか、その両方がいいかを親に選んでもらう。

親が字を書くことを選ぶなら、親の考えやアイデアを相談員が書くか親自身が書くかを聞く。相談員が書くことを親が選ぶ場合には、必ず親の考えやアイデアを親の言葉を使って書くようにする。一文ずつ書いては親に読み上げる。こうすることで、相談員が正確に親の見方を捕えようとしていることが親に伝わるし、フォローアップ質問の機会にもなる。

③それぞれの家に取り組む

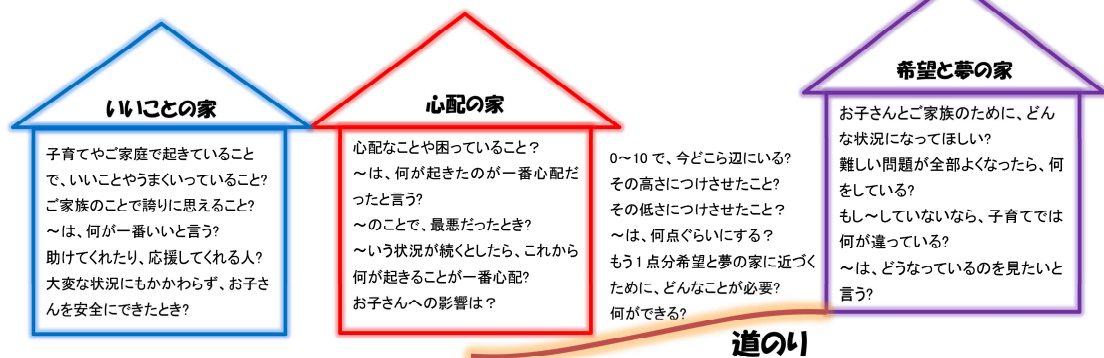
以下の三つの家の親用ワークシートでは、それぞれの家をつくるのに有用な質問を挙げてあります。

（＊「三つの家の親用ワークシート」は井上直美の許可を得て掲載）

三つの家 親用ワークシート

必要なもの：A3白紙1枚、またはA4白紙4枚、カラーペンたくさん。横並びに座る方がいい。

- ① 自己紹介：〇〇の△△です。お子さんのことで何か心配なことがあるときに、ご家族が心配なことを解決して、お子さんを安全に育てていかれるのを手伝うのが仕事です。ご家族に何が起こっているのか、まずおかあさんの話を聞かせてほしいのですが、いいですか？
- ② 三つの家の紹介：私は、大人も子ども、みんなの見方を聞かせてもらう三つの家というやり方が好きです。こんなふうに家を三つ描いて（家の輪郭を描きながら）、その家の中に、子育てやご家族の生活でうまくいっていること、心配していること、これからの希望や夢、あるいはこれから起きる必要があると思われることを、言葉や絵にかいていくやり方です。ご自分で言葉や絵をかかれてもいいですし、話していただいて、私が書いてもいいです。これを使ってもいいですか？
- ③ 親が話したことを書くときは：親が言った通りの言葉を使う。正しく理解して書いているかを、適宜確認する。話したくないであろうことも話していることに、敬意と尊重を示す。
- ④ もっと情報が必要な時は：フォローアップの質問（はじめに広く聞いて引き出した後、具体的なことを詳しく聞く）、関係性の質問（他の人の視点に立って、自分では気づかなかった側面に気づいてもらう）例外的質問（問題に対する例外を教える）、場面をより絞った質問（取り上げたいことを、具体的な場面を挙げて聞く）
- ⑤ 終わる時：難しいことも正直に話してくれて、ありがとうございます。これから協力して心配に対応していけると思えます。他に、お子さんの見方も重要なので、三つの家で聞いていいですか？これから本当にお子さんを安全に育てていくためには、みんなに応援してもらう必要があります。あなたやお子さんの三つの家を、誰にわかってもらうといいと思いますか？ コピーと原本、どちらを持ちたいですか？



④児童相談機関（市町）の見方を伝える

伝え方は、

- 1 番目、親の見方を聞く。（それぞれの家で）
- 2 番目、児童相談機関（市町）がどんなふうに見ていると思うかを、親に聞く。
- 3 番目、児童相談機関（市町）の見方を話す。

2 番目と 3 番目のステップについては、家三つを全部つくってからでも、家を一つつくったごとにやってもよい。

⑤次に何が起きる必要があるかを話し合う

児童相談機関（市町）のアセスメントとプランニングのプロセスを親に詳しく説明し、次に何が起る必要があるかを話し合う。親に説明する情報は次のようなものです。

- 子ども虐待対応のアセスメントとプランニングのプロセスは、三つの鍵となる領域に焦点を当てる。①みんなは何を心配しているか。②家庭で何がうまくいっているか。③子どもを心配する人は、心配に対応するために何が起きる必要があると思うか。
- 児童相談機関（市町）は、親の養育で十分な子どもの安全があるかどうかというアセスメントをしなければならない。もし心配があるなら、それに対応するために何が起きる必要があるかというプランを立てなければならない。
- 心配があるなら、プランニングに参加して親がこれから子どもの安全を保つのをサポート

ートできる応援団（家族、友人、支援者）を、親に作ってもらう必要がある。

●児童相談機関（市町）が家族、子ども、家族と子どもにつながる他の重要人物の見方を聞くなら、いいアセスメントができる。家族とその応援団がプランづくりに参加するなら、いいプランを作ることができる。

⑥もし当面の安全に懸念があるなら

子どもの当面の安全が心配になるような情報が三つの家を使う間に開示されたら、セッションを終える前に、親とよく話し合っ、当面の安全計画を一緒につくる必要があります。当面の安全計画は、当面あるいはしばらくの間（数日、数週間）の子どもの安全を確保する計画です。

家族に当面の安全計画が必要なことを説明し、安全を確保するためのアイデアや子ども、家族のために何が一番いいと思うかを考えてもらいます。ここで児童相談機関（市町）として交渉余地がない事柄は、必ず見えるように書き出すなどして、明確に理解されるようにします。三つの家の「これから何が起きることが心配か」や「こどもを守るために役立ったこと」、「安全を確信するために何が起きる必要があるか」などの記述が安全計画を作るのに役立ちます。

